

# 東北地方の弥生時代前期集落の立地について

能 登 健 ・ 小 島 敦 子

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 1. はじめに                 | 4. 東北地方の弥生時代前期集落の立地 |
| 2. 調査の視点                | 5. おわりに             |
| 3. 東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の立地調査 |                     |

## — 論 文 要 旨 —

東日本の縄文時代から弥生時代への移行期における本格的な水田稲作農業社会への転換がどのように達成されたかについては、具体的に明らかになっているとは言い難い。遠賀川系土器および類遠賀川系土器の分布から水田稲作文化の伝播ルートが提起されているが、筆者らは東日本の水田稲作開始期を理解するには遠賀川系土器を稲作技術の波及を示す遺物ととらえ、その出土遺跡立地の空間論的検討も有効と考える。

関東地方の弥生時代前期の集落立地は前稿でまとめてある（能登・小島1989）。また東北地方のそれと比較して東日本の弥生時代前期集落立地の特性については、「集落・居館・都市的遺跡と生活用具―関東・東北」『考古資料大観10遺跡・遺構』（能登・小島2004）に発表した。ここでは東北地方のそれぞれの遺跡立地調査の内容まで詳述することができなかった。そこで、ここでは遺跡立地の現地調査を実施した東北地方30遺跡の観察結果を記載することを目的とする。また遠賀川系土器は出土していないが参考として同時期の6遺跡を加えてある。

現地調査の結果、東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の多くは、近くに縄文時代晩期の遺跡があり、その立地はすべての遺跡で広狭の差こそあれ水田耕作が可能であり、6つの水田農耕を前提にした農耕集落の立地パターンを認識することができた。しかし、遺跡の多くが狭い可耕地の地点に立地していたことから、東北地方の弥生時代前期の集落立地が水田可耕地の発展性を第一義として行われたのではなく、縄文時代晩期終末の遺跡のなかで水田稲作の可能なところに遠賀川系土器に象徴される水田稲作情報が受容されたことを示していると思われた。

このような東北地方の遺跡立地のあり方は関東地方のそれと同じであり、その遺跡分布の傾向からは東日本の遠賀川系土器出土遺跡の立地は水田耕作を開始するための新しい地点の選地ではなく、生活拠点としての居住域が継続しているところへ遠賀川系土器がもたらされている可能性がきわめて高い。遠賀川系土器に象徴される水田稲作情報は、弥生時代前期の時間幅のなかで、線状ではなく網の目状に縄文時代晩期末の情報ネットワークによって確実に浸透していったと思われた。そして、多くの場合、初期弥生土器の出土遺跡にはその後の継続性がない。本格的な農耕集落としての遺跡選地はその後起こるのであろう。

具体的な水田遺構についてはいくつかの遺跡で見つかっている。しかし、現地調査で確認した可耕地は極めて小規模な水田経営をイメージさせるもので、これまで東日本でみつかっている初期水田遺跡のイメージとは大きく異なっていることもわかり始めている。

### キーワード

対象時代 弥生時代前期  
対象地方 東北地方 東日本  
研究対象 水田稲作開始期 遺跡立地

1. はじめに

東日本の縄文時代から弥生時代への移行期には、本格的な水田稲作農業社会への転換が行われたと考えられている。それは、東日本で出土する遠賀川系土器が、西日本の初期水田稲作技術をもつ集団の土器を模倣していることから、東日本の水田稲作農業社会への転換を象徴的に表わすことによっている。しかし、その転換がどのように達成されたかについては、水田遺構や集落遺跡の発見が西日本より少ないことから、具体的に明らかになっ

表1 東北地方の遠賀川系土器出土遺跡

番号	遺 跡 名	県	所 在 地
1	吾妻野II	青森県	西津軽郡深浦町
2	大曲	青森県	西津軽郡鯉ヶ沢町
3	宇田野(2)	青森県	弘前市大字小友
4	砂沢	青森県	弘前市大字三和
5	井沢	青森県	南津軽郡平賀町
6	五輪野	青森県	南津軽郡尾上町
7	金田一川	岩手県	二戸郡上斗米
8	足沢	岩手県	二戸郡福岡町
9	上杉沢	岩手県	九戸郡浄法寺町
10	八幡	青森県	八戸市大字櫛引
11	剣吉荒町	青森県	三戸郡名川町
12	牛ヶ沢(4)	青森県	八戸市大字根城
13	畑内	青森県	三戸郡南郷村
14	大日向II	岩手県	九戸郡軽米町
15	君成田IV	岩手県	九戸郡軽米町
16	小峠	青森県	八戸市根城
17	松石橋	青森県	三戸郡南郷村
18	是川中居	青森県	八戸市是川
19	館の上	秋田県	山本郡八竜町
20	地藏田	秋田県	秋田市四ツ小屋
21	生石2	山形県	酒田市生石
22	横長根A	秋田県	南秋田郡若美町
23	芋野II	岩手県	宮古市大字落合
24	兵庫館	岩手県	北上市和賀町
25	十三塚	宮城県	名取市手倉田
26	原	宮城県	名取市田高
27	根古屋	福島県	伊達郡霊山町
28	荒屋敷	福島県	大沼郡三島町
29	鳥内	福島県	石川郡石川町
30	墓料	福島県	会津若松市一箕町

ているとは言い難い。

1980年代以降に遠賀川系土器および類遠賀川系土器が東北地方で数多く確認されるようになると、その遺跡分布から、日本海沿岸の集団移住を伴う伝播ルートや東北地方内陸の伝播ルートが提起された(佐原1986・1987、高瀬2000)。しかし、遺物分布の本質的な意味は伝播のルートを特定することだけではなく、どのようにしてそこに人々が住み、生活を始め、その遺物を残したかである。分布の背景には、単なる稲作技術の伝播にとどまらず、稲作農業社会全体の情報の波及・受容・導入があるはずである。

それを最も端的にあらわすのは、水田稲作情報とともにもたらされたと考えられる遠賀川系土器が、どのような農耕環境をもつ集落で出土しているかであろう。東日本の水田稲作開始期を理解するには、遠賀川系土器を稲作技術の波及を示す遺物ととらえ、その出土遺跡立地の空間論的検討も有効と考える。

このような視点から筆者らは、関東地方の弥生時代前期の集落立地についてまとめ(能登・小島1989)、東北地方のそれと比較して東日本の弥生時代前期集落立地の特性について、「集落・居館・都市的遺跡と生活用具―関東・東北」『考古資料大観10遺跡・遺構』ですでに述べている(能登・小島2004)。しかし、後者の論考では東北地方のそれぞれの遺跡立地調査の内容まで詳述することができなかった。そこで、ここでは実際に踏査した東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の立地観察結果を記載しておくことにしたい。現地調査は平成14年8月から平成15年10月にかけて実施した。

2. 調査の視点

今回の立地調査は、東北地方の遠賀川系土器および類遠賀川系土器が出土した30遺跡(表1)と、参考となる6遺跡を対象とした。

遠賀川系土器は前述したように西日本の初期水田稲作技術をもつ集団の土器を模倣している。最近では、遠賀川系土器の要素はみられるが変容の大きい在地でつくられた東北地方の遠賀川系土器を「類遠賀川系土器」として区別する立場もある(高瀬2000b)が、本稿では各遺跡の立地を分析対象としていることから一括して従来の名称の通り遠賀川系土器として扱ってしまっている。

かつて遺跡立地を調査した関東地方では、遠賀川系土器の出土遺跡数が少なかったことから、遠賀川系土器に加えて、弥生時代前期末に位置づけられている東海西部系の条痕文系土器や在地の初期弥生土器が出土する遺跡の立地も調査した。しかし東北地方では出土遺跡数がまとまっており、遠賀川系土器が出土した遺構は住居・墓・包含層と多岐にわたっている。特に住居からの出土例が4例あり、包含層の出土がほとんどを占める関東地方の

状況とは異なっていて、遠賀川系土器出土遺跡から具体的な弥生時代前期の集落像を描くことも可能になっている。

これまで遺跡の立地分析は地形だけによることが多かったが、農耕集落については眼前に広がる水田可耕地の広さや集水条件による発展性に着目して観察することが重要である。

基本的な調査方法は、関東地方の遺跡立地調査と同様である。遠賀川系土器が出土した遺跡の周辺地形を踏査し、遺跡周辺で水田稲作が可能か、さらに可耕地はどこかを想定した。可耕地の推定については遺跡から最も至近の沖積低地とした。この場合の遺跡とは一般に集落としてとらえられる居住域のほかに、居住域に接してあると思われる墓域をも含めている。

例えば、秋田県地蔵田遺跡では溝に囲まれた竪穴住居群と、それに隣接して土坑墓群が検出された。ここで検出された住居と墓は同時期で、一時期に数軒の竪穴住居がたてられた居住域とそれに付随する墓域が形成されていたことを示している。

遠賀川系土器を出土する竪穴住居の遺跡は、岩手県畑内遺跡、大日向II遺跡、上杉沢遺跡、秋田県横根A遺跡の4遺跡にとどまるが、住居と同時期の墓から遠賀川系土器が出土している地蔵田遺跡の例からは、墓坑や包含層から遠賀川系土器が出土している遺跡でも、近くに弥生時代前期の集落を想定することが可能であろう。

### 3. 東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の立地調査

東北地方で遠賀川系土器を出土した遺跡のうち、表1に示した30遺跡と、遠賀川系土器は出土していないが参考として同時期の6遺跡について、それぞれ現地に赴いて水田農耕を受容した集落(遺跡)がどのような立地条件をもっているのかについての観察をおこなった。ここでは各遺跡の観察概要を報告する。

なお、各遺跡位置図は遺跡の位置を●印で、周辺の水田可耕地となり得る沖積地を網目で示してある。

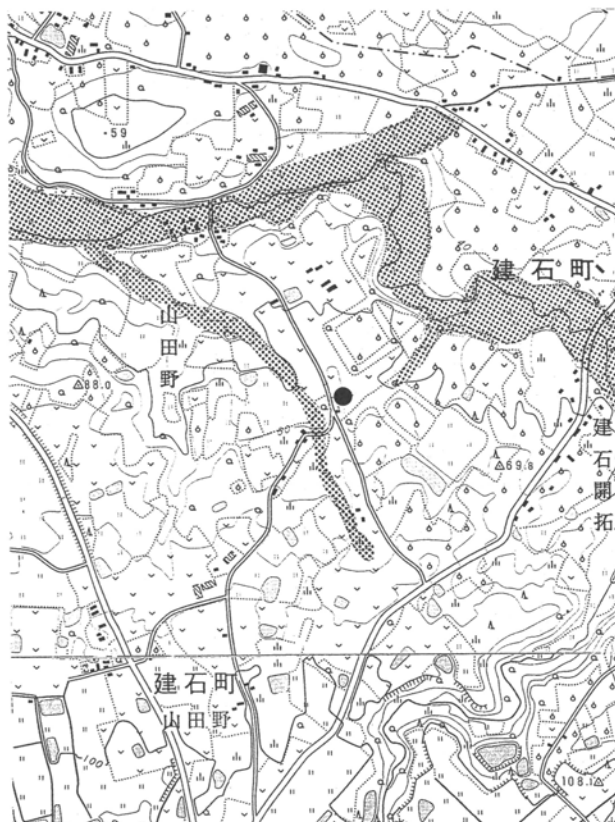
#### 吾妻野II遺跡(図1-1)

青森県西津軽郡深浦町広戸字東野上にある。畑の耕作中に遠賀川系土器が出土し、保管されていた。居住域と思われる。

遺跡は海に向かって直接開口している開析谷に面してある。現在は谷頭にある溜池からの灌漑によって谷の中が水田化されている。この谷は奥行きが短く狭小で水田造成が可能な沖積地は狭いが、遺跡の立地する地点では二本の谷が落ち合った典型的な落合地形になっている。このようなところでの水田造成は、安定した勾配と、二本の水流による利水にたけており、加えて肥沃な土壌を持つことが多く、筆者らは弥生時代の水田選地の特徴の



1. 吾妻野II遺跡



2. 大曲遺跡

図1 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(1)

一つでもあると考えている。しかし、縄文時代にあって飲料水の確保や食糧加工の場として優位なところであることも忘れてはならない。本遺跡では谷の両側は傾斜がせまっており、想定される生産域も居住域も極めて狭いところであるが、猫の額ほどの水田経営には水懸りは良いところである。

吾妻野Ⅱ遺跡は、南側の吾妻川沿いに広い水田可耕地がありつつも、この狭小な谷筋に立地していることに注目しておきたい。これは、もともとこの場所に縄文晩期の小集落があり、そこに遠賀川系土器がきたのか、それとも水田開始に伴ってこの地を選地したのか、が問題になる。少なくとも、水田耕作を組織的や計画的に経営するものであるならば吾妻川沿いの広い沖積地を選地したことだろう。

#### 大曲遺跡（図1－2）

青森県西津軽郡鰺ヶ沢町建石町大曲にある。岩木山麓

には遠賀川系土器が出土した遺跡は3遺跡あるが、本遺跡はこのうち北麓にある遺跡である。昭和60年に青森県立郷土館が学術発掘した。明確な遺構は検出されなかったが、大洞A'式・砂沢式土器とともに、遠賀川系の壺と甕が出土した。

鳴沢川右岸の支谷2本の谷頭部分にあたる。水田を営むとすれば猫の額のようなものであろう。現在、山田野の支谷は全面水田化されているが溜池灌漑である。周辺の溜池は湧水および天水溜池と思われる。

#### 宇田野2遺跡（図2－3）

青森県弘前市小友の岩木山東麓にある。平成6・7年におこなわれた農道整備事業に伴う発掘調査で谷部から砂沢式土器とともに遠賀川系土器が出土した。また台地面から谷部と同時期と見られている土坑墓5基が検出されている。

大谷川の流れる谷地は東西方向に開析されており、遺



図2 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(2)

3. 宇田野(2)遺跡  
a. 小友遺跡

4. 砂沢遺跡  
b. 神原遺跡



跡付近では幅が10～15m程度で台地との比高は4～5mである。この谷は100mほど上流で2つの開析谷が合流したものである。大谷川は南側の沢沿いに極度な下刻侵食をしつつ流れているために、北側は乏水性の谷底になっている。遺跡は北側の谷筋にあることから、眼下に生産域をもつとすれば、谷地縁辺の浸みだし水に依拠する水田になるだろう。なお、現在ではこの谷の乏水地域は全面が水田化されているが、南側の大谷川上流部から北側の谷頭付近に用水路で引水することによって用水を確保しているらしい。

なお、遺跡のある台地の北側にも細い谷地がある。この谷地も全面が水田化されているが、現在は溜池によって用水が確保されている。岩木山麓には乏水性の開析谷が多いが、宇田野遺跡に面する谷もそのうちの一つである。

#### 砂沢遺跡（図2-4）

岩木山東麓の弥生時代前期遺跡群のうち代表的な遺跡で、青森県弘前市三和にある。現在、砂沢遺跡の発掘地点は砂沢溜池の中に水没している。この砂沢溜池は江戸時代末の天保年間に灌漑用の溜池として造られた。その後何度かの修復工事の後、現在では広さ約37haの規模をもつ溜池になっている。この溜池が造られてから、遺跡地が水没の繰り返しによる浸食で地中の遺物が露出するようになり、明治時代には遺跡の存在が知られるようになったという。昭和20年代には明治大学と東北大学が調査し、芹沢長介によって砂沢式土器が命名されたことで有名である。

昭和40年代になると土取りが盛んになり遺跡破壊が危ぶまれて、文化庁の指導で昭和49年から5年にわたる発掘調査がおこなわれた。縄文時代後期の住居3棟、溝、ピット群などが検出された。ピット群からは砂沢式・二枚橋式土器とともに遠賀川系土器が出土している。

遺跡は岩木山東麓に立地する。砂沢溜池は山麓を開析する幾筋かの開析谷が集まるところに造られており、遺跡も大小2条の帯状谷地に挟まれた舌状の台地末端にある。西側の谷地は奥行きが長く、谷の北縁に小河川が流れている。遺跡の北側は数条の帯状谷地が集まる落合地形になっており、良好な水田可耕地と思われる。

なお、発掘調査では台地斜面から台地下平坦部にかけてたところ「縄文時代晩期終末から弥生時代初頭」といわれる水田が検出され話題になった。報告書によれば、この水田の「畦畔は砂沢式土器を多く含む第IV'層に覆われている」という。出土土器は「砂沢式土器が多く、大洞A'式、遠賀川系土器も出土した。また数点であるが二枚橋式土器も出土している。土器はすべて細片で、摩滅しているものが多い」。ほかに炭化米や炭化種子も出土している。畦畔の構築年代は「第V層（上部に大洞A'式土

器が多く、砂沢式土器も出土）が畦畔状に削られ平坦にされ、水田西側畦畔が第IV'上層（砂沢式土器を多く含む。）に覆われることなどから砂沢式土器期のもものと考えられる。」とされている。溝が10条検出されているが、これらと水田の関係は明らかにされなかった。

小友遺跡（図2-a）・神原遺跡（図2-b）・清水森西遺跡・牧野II遺跡（参考）

岩木山東麓には弥生時代前期の遺跡が比較的多く分布している。遠賀川系土器の出土の報告はないが、上記4遺跡の関連遺跡として現地の地形観察をおこなった。

小友遺跡および神原遺跡は青森県弘前市小友にある。両遺跡とも大峰川・前菟川・大石川の合流地点近くにあり、岩木山東麓末端の台地上に立地している。周辺には沢の口に広い水田可耕地がある。岩木山麓の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡の中ではこの二つの遺跡の立地が、広大な沖積地に面しているという点で際立っている。言い換えれば、岩木山麓の弥生時代前期の遺跡のほとんどが集落をつくるにあたって、広大な水田耕地が期待できるところを選んでいないという点で重要なことになる。

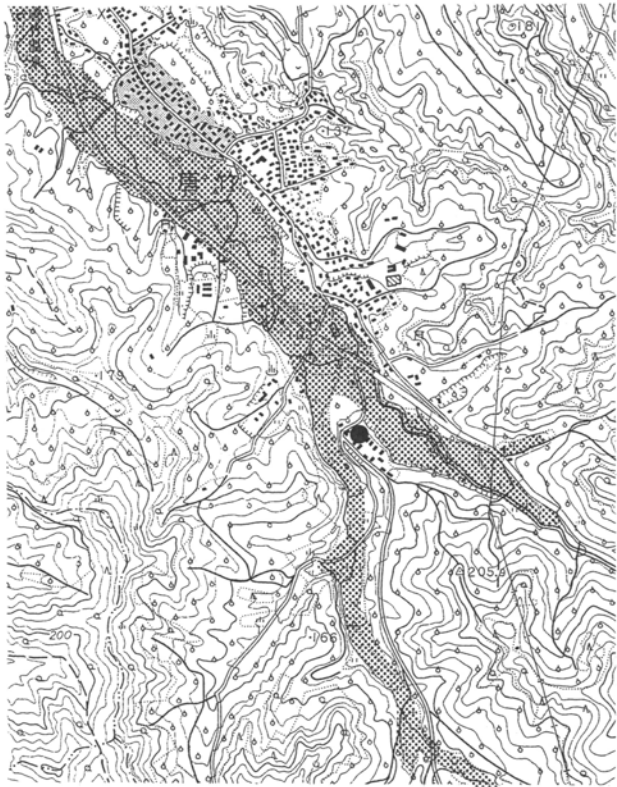
清水森西遺跡は青森県弘前市十面沢に、牧野II遺跡は弘前市檜木に所在し、ともに岩木山麓の末端に近接している。清水森西遺跡は縄文時代晩期の土器が出土している。廻堰大溜池に南から半島状につき出す台地上にある。西側には十面沢沢田から伸びる長い帯状低地があり、南側の短い帯状低地との落合地形を望むところにある。砂沢遺跡とほとんど同じ立地をしている。また、牧野II遺跡は岩木山麓を開析する前菟川の右岸台地上にある。遺跡のすぐ南で前菟川を含む3条の帯状谷地が集まる落合地形になっている。ともに、岩木山麓で遠賀川系土器を出土する遺跡との立地の差違はなかった。

#### 井沢遺跡（図3-5）

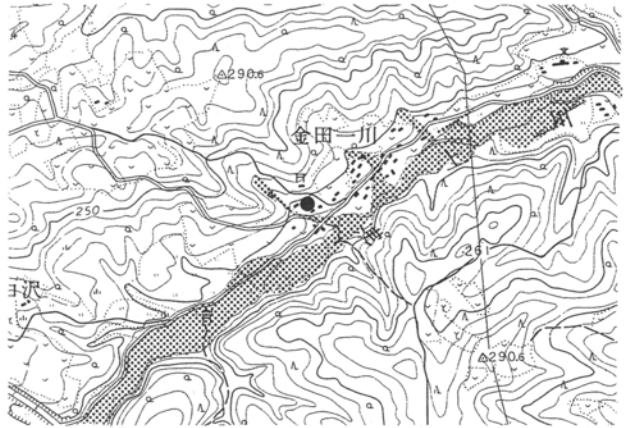
青森県南津軽郡平賀町唐竹にある。昭和50年に別荘建設の基礎工事に際して土器が出土し、発掘調査がおこなわれた。遠賀川系土器は包含層から井沢式土器とともに出土した。石庖丁型石製品、頁岩製管玉、靱殻圧痕のある土器などが出土している。

唐竹川によって開析されたやや幅広の谷は上流部で二又に分かれる。遺跡は、その二つの谷に挟まれた台地上にあり、落合地形の沖積地を望んでいる。谷は深く、20m前後の比高がある。谷底は平坦で水田可耕地としては拡大性には乏しいが、土壌や利水的には極めて良好なところだと思われる。

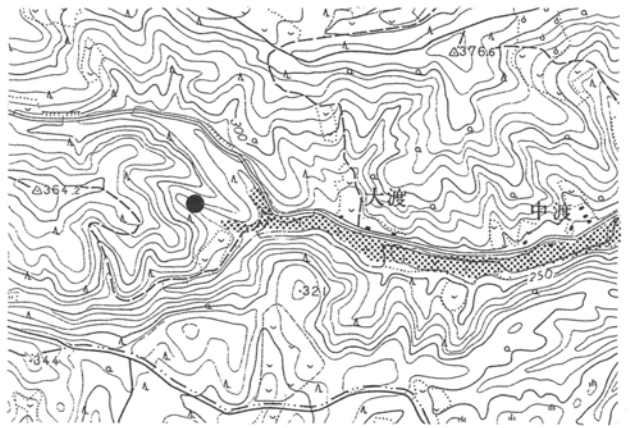
井沢遺跡の周辺および北部の山麓には発達した開析谷地帯がある。ここには弥生時代中期の遺跡が多く点在するところでもある。地元では、弥生時代中期になると岩



5. 井沢遺跡



7. 金田一川遺跡



8. 足沢遺跡

6. 五輪野遺跡

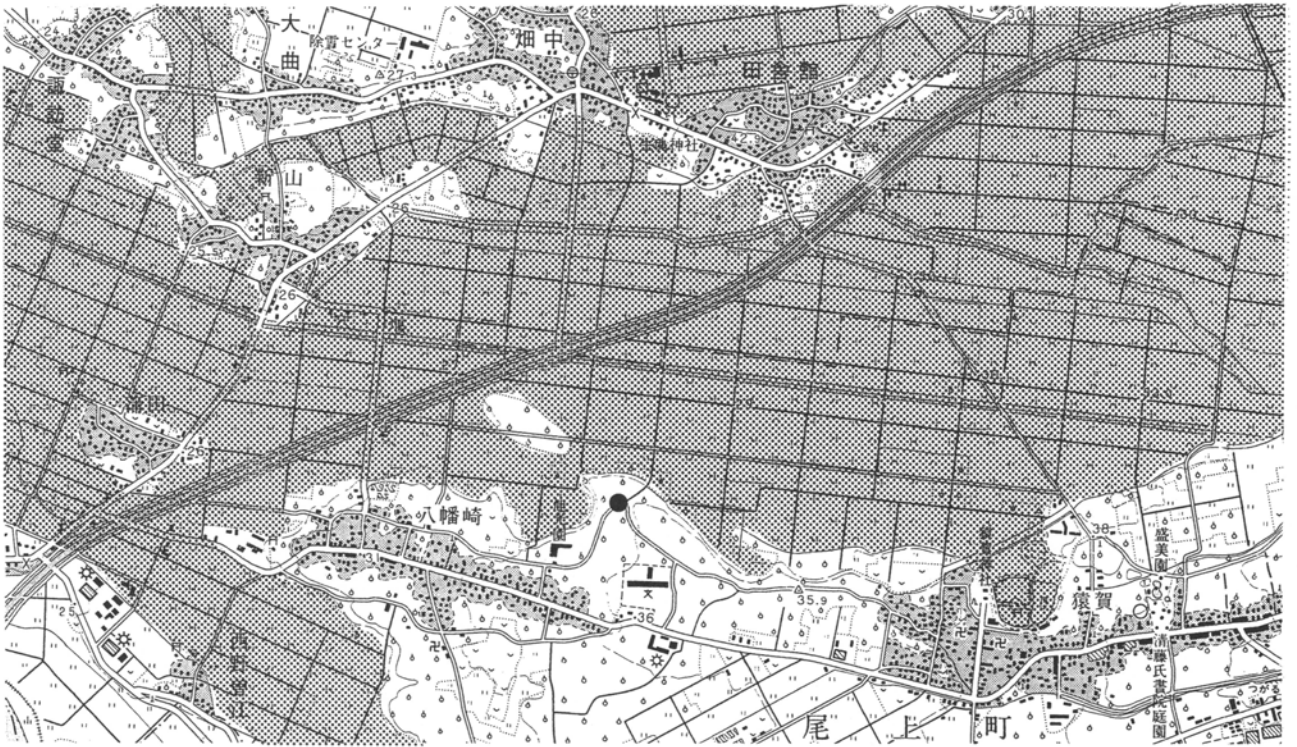


図3 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(3)

木山麓の弥生時代前期遺跡が良好な水田耕地を求めて選地移動した地域との見解もある。

#### 五輪野遺跡（図3-6）

青森県南津軽郡尾上町にある。昭和44年に農道整備のときに壺棺が出土している。昭和57年には農道拡幅工事にともなう発掘調査がおこなわれ、埋置された状態の壺棺が出土している。この地域は浅瀬石川の氾濫源にあたり、田舎館村にある垂柳遺跡もこの地形单元の中にある。

遺跡は比高4～5mほどの台地末端にある。眼前には浅瀬石川によって形成された広大な沖積地があり、ここが水田を中心とした生産域の候補地になる。現在は穴堰と称する用水路が設けられて、全面的に水田化がはかられている。空中写真によると、浅瀬石橋のあたりから穴堰にかけて浅瀬石川の乱流跡と思われる旧流路が確認できるが、初期の水田はこのような部分から始まったのだろう。しかし、その場合は水田耕地に接した自然堤防などの微高地に居住域が立地することが多い。本遺跡は利水の観点では良好な水田経営が望めるが、洪水の危険も大きいところでもある。

#### 金田一川遺跡（図3-7）

岩手県二戸郡上斗米にある。昭和21年に家屋建設の際に遠賀川系壺が変形工字文の鉢とともに出土した。壺内から人骨が出土し、壺棺と考えられている。

馬淵川支流海上川左岸、金田一川集落の上位にある。この台地は両側にV字状の沢の開析があり、出土地の山際には湧水もある。おそらく、この一帯に集落もあるのだろう。西側の沢は水田耕作不可能。海上川兩岸の最下位段丘に浸みだした湧き水をつかつての狭い水田経営になるだろう。

#### 足沢遺跡（図3-8）

岩手県二戸郡福岡町御返地足沢大渡にある。昭和30年に山内清男氏が発掘調査し、縄文時代後期の住居と晩期終末から続縄文時代にかけての包含層が検出されている。この資料は平成11年に東北大学文学部考古学研究室が整理し、奈良国立文化財研究所史料として公表された。この報告のなかにI区24日付けの資料に遠賀川式土器の壺が含まれていたとある。報告では縄文時代晩期大洞A'式相当土器に供伴する可能性が高いとしている。この壺は板付II a式で搬入品と見られている。

遺跡は足沢川最奥部の左岸にある。足沢川は、馬淵川の支流である十文字川の最上流の小支谷である。足沢川の谷はすでに山岳地域に入り、V字的な様相を呈しているが、遺跡の周辺にはやや平坦地はある。遺跡は左岸中腹にあり、比高は20～30mくらいかもしれない。この斜面には2本の支谷があるが、V字で水田可耕地は0であ

る。谷底はガラガラ石。遺跡地は斜面末端の狭い平坦地にある。当時開墾が進んで畑になった部分で遺跡が見つかったのであろう。現在は杉の植林と雑木林になっている。当時としては下の平坦面も森林植生に覆われていて、良好な水田可耕地があったとは思われない。

足沢遺跡・金田一川遺跡などは、水田可耕地はあるものの水田耕作をしていたかどうかは不明である。板付式土器あるいは遠賀川系土器が出土することから、水田稲作は知っていたと考える方が自然だろう。水田稲作を実際に選択したかどうかは別の問題である。

#### 上杉沢遺跡（図4-9）

岩手県九戸郡浄法寺町杉沢にある。昭和60年の宅地造成で遺物が出土し、平成7年に個人の農業関連施設建設に伴って試掘調査が行われ、縄文時代晩期から続縄文時代前葉期の集落跡であることが判明した。平成8～10年には記録保存調査が実施されたが、平成10年には保存に向けての調査に変わり、埋め戻された。調査では、縄文晩期中葉の住居30棟、晩期末から続縄文前葉の住居4棟が検出され、そのうちの9号住居から遠賀川系土器の壺が出土している。近接地で太型蛤刃石斧が表採されている。

遺跡は安比川の支流である太田川の左岸段丘にある。太田川の谷筋の左岸に小支谷が入り、半島状の地形になっている。水田の造成できる生産域は二つの谷が合流する落合地形になる。地元農民への聞き込み調査によれば、この谷筋の水田は水が冷たくて稲作に支障を来していたという。かつては温水効果をもとめて小さな田に溜め水をする「水ぬるまし」をつくっていたが、今は稲の品種を考えることで解決しているという。

#### 八幡遺跡（図4-10）

青森県八戸市櫛引にある。昭和62年の国道104号線櫛引橋架替工事に伴う発掘調査で、砂沢式と遠賀川系土器の破片が包含層から出土した。これらの供伴関係は不明とされている。また、平成2年の八戸市館支所庁舎建設工事に伴う発掘調査で弥生時代前期砂沢式期の住居1軒が見つかり、遠賀川系土器破片が出土した。本住居からは弥生時代後期(天王山式土器)の破片の出土も報告されている。また、住居床面直上層の種子同定によって、コメ・オオムギ・コムギ・アワ・ヒエ・キビが検出されたことが報告されている。

法領屋敷から伸びる幅の狭い帯状の谷地が、馬淵川右岸で合流する地点に遺跡がある。遺跡の立地する地点はこの帯状谷地に派生する小さな開析谷の谷頭にあたる。水田可耕地は馬淵川沿いの沖積地である可能性もあるが、現地に立ってみると至近にあるこの帯状谷地の中にある公算が大きい。







#### 剣吉荒町遺跡（図4—11）

青森県三戸郡名川町剣吉荒町にある。昭和31年に第Ⅰ地点で遠賀川系土器の壺が変形工字文の鉢や台付浅鉢とともに出土した。また、昭和58年の青森県立郷土館による第Ⅱ地点の学術調査によって包含層から遠賀川系土器が出土している。第Ⅰ地点の一括資料については、変形工字文の鉢などを砂沢式とみるか大洞A'式とみるかの議論がある。

遺跡は、剣吉山から馬淵川に向かう河川の谷筋にある。二つの地点は近接していることから広がりをもつ同じ遺跡であるだろう。遺跡は山麓末端の崩壊地形上にあると思われるが、屋込みのため詳細は不明である。

馬淵川の左岸にある沖積地が水利・拡大性ともに稲作環境の良好地であるが、遺跡に接した狭い帯状の谷地が生産域とも考えられる。

岩木山麓の小友・神原遺跡等と同一条件なのであろう。

#### 牛ヶ沢遺跡（図4—12）

青森県八戸市大字松館にある。八戸市博物館に「青森県三戸郡大館村大字松館字牛ヶ沢出土（昭和21年）」と注記された遠賀川系といわれる甕が所蔵されている。報告者は松館川左岸の階上町との境界付近の出土と補足しているが、詳しい出土状況は不明である。最近になって発掘調査された牛ヶ沢（4）遺跡は、この甕の出土地点の近くにあらたと思われるが、ここでは弥生時代前期の住居6棟と土抗8基が検出されている。遠賀川系土器の出土はない。

牛ヶ沢（4）遺跡は、新井田川支流の松館川左岸に開析された幅5～10mの狭小な谷に面している。沖積地に接した傾斜地が発掘区で、眼下の水田は可耕地としてもいいものだろう。右岸には小さな谷が合流しており、変則的な形の落合地形とも見える。昭和21年の甕出土地点が階上町との境とすれば、この谷の谷口にあたる。現状では水田化されていないが、水田可耕地は猫の額といったところである。この地域の松館川は両岸にほとんど沖積地をもたない。特に谷口は崖になっており、松館川沖積地では水田農耕は不可能であっただろう。

地元でいわれる北上・三八地域は北上山地にあたり、この地域の遺跡は山間地を流れる河川やその支流沿いに点在するが、いずれの遺跡もその地域の大河川に面した立地を取らないのが特徴である。

#### 畑内遺跡（図5—13）

青森県三戸郡南郷村島守字畑内にある。平成4～13年にかけて世増ダムの建設に伴って発掘調査された。この地域はすでに住民も退去し、水没を待つ状態で放置されていた。これまでに9冊の報告書が刊行されているが、合計6棟の弥生時代前期の住居が報告されている。この

うち8号住居と53号住居から遠賀川系土器が出土している。また、平成12年度調査区からは弥生時代中期末～後期の土器と、弥生時代後期天王山式期の住居5棟が検出されている。

遺跡は、松石橋遺跡のある新井田川の上流部にあたり、右岸の丘陵末端に形成された小規模な崩壊地形上にある。現在の水田は新井田川やそれに合流する沖積低地にある。報告書には稲作はないとあるが、当時の水田域を想定するなら、扇状地形に開析された沖積低地である小さな谷部分になるだろう。安定した水田経営が可能であり継続性はあるが、拡大性には乏しい。

#### 大日向Ⅱ遺跡（図5—14）

岩手県九戸郡軽米町にある。昭和59年に東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う国道340号線拡幅工事で発掘調査された。8棟検出された弥生時代初頭の住居のうち、2棟から遠賀川系土器が出土している。

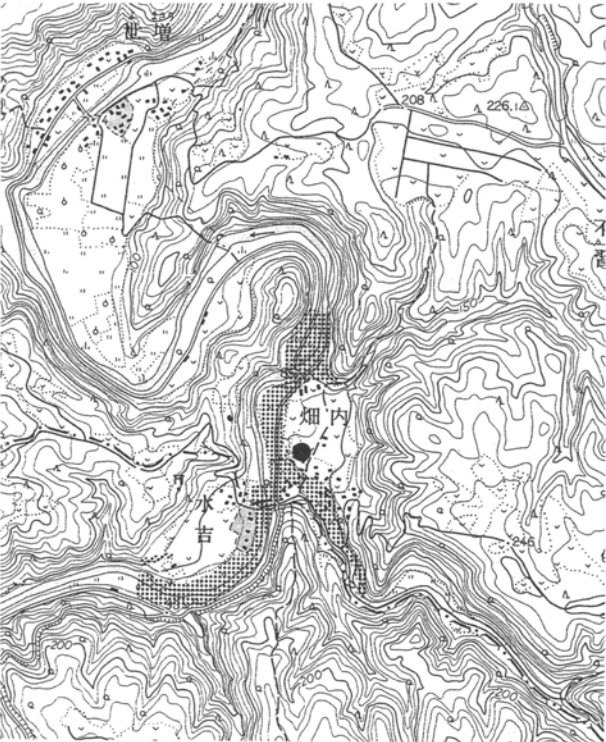
遺跡は、新井田川の支流雪谷川の左岸に開析された谷との間にできた舌状の丘陵性台地上に立地しており、発掘地点は開析谷に面したところになる。この開析谷は遺跡付近では二つに分かれており、眼下は落合地形となる。開析谷の底面は現在埋没が進行しているが、水流も見られることから当時としては良好な水田可耕地ととらえて良いであろう。雪谷川左岸の沖積地も可耕地としての候補になるが、支谷の開析谷面の方がより安定していると思われる。

馬場野Ⅱ遺跡は地点が異なるが、同様な開析谷に面しており、立地としては大日向Ⅱ遺跡と良く似ている。ここでも弥生時代初頭の住居が11棟見つかったているが、遠賀川系土器の出土はない。一方、周辺にある馬場野Ⅰ遺跡や吹屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡などは縄文時代晩期の遺構が検出された遺跡ではあるが、弥生時代の遺構はない。至近の谷地は狭く水流もなく可耕地となる低地を伴っていない。水田耕作を全く意識していない立地である。

大日向Ⅱ遺跡・馬場野Ⅱ遺跡にも砂沢式以前の縄文時代晩期の遺構があることから、遠賀川系土器のある遺跡は実際に水田耕作ができる場所が選ばれていると考えることが可能である。あるいは縄文時代晩期にもこのような2種類の立地があることからすれば、大日向Ⅱ遺跡・馬場野Ⅱ遺跡はもともと水田耕作を認識していたとの可能性も出てくる。すなわち縄文時代晩期に稲作がおこなわれていたことも考慮にいれる必要があるかもしれない。

#### 君成田Ⅳ遺跡（図5—15）

岩手県九戸郡軽米町にある。昭和55年に八戸自動車道建設工事に伴って発掘調査された。遺跡南端の緩傾斜地に遠賀川系土器の壺が埋設状態で出土した。ほかに大洞



13. 畑内遺跡

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 14. 大日向II遺跡 | 15. 君成田IV遺跡 |
| a. 馬場野II遺跡  | b. 馬場野I遺跡   |
| c. 叭屋敷II遺跡  | d. 叭屋敷III遺跡 |

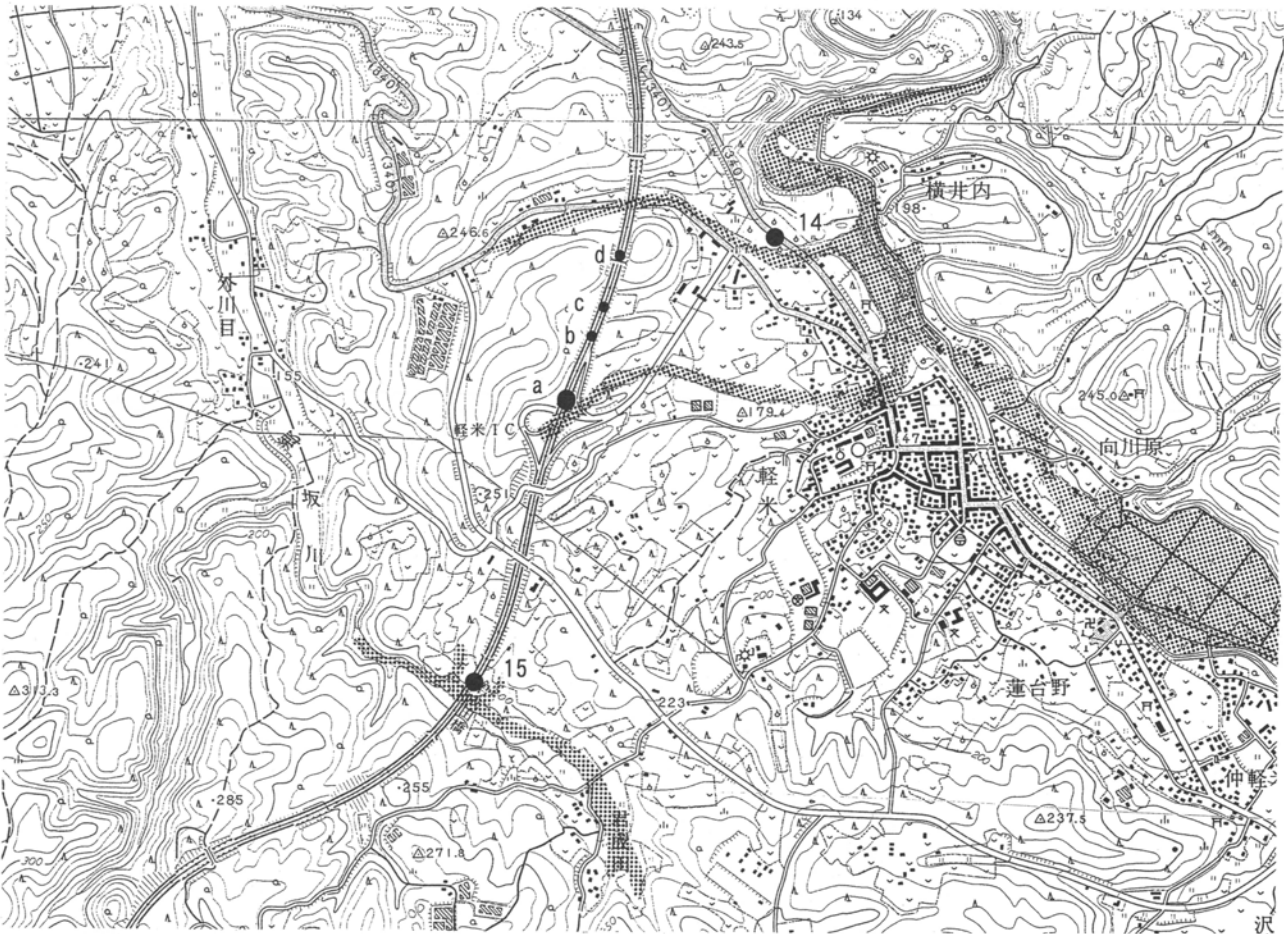


図5 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(5)

A'式土器の埋設土器も出土している。

遺跡は新井田川の支流郷坂川の右岸丘陵上にある。弥生時代初頭の遺構は丘陵末端にあった。両側を支谷に区切られた小規模な馬の背状の地形を呈している。この両側の小支谷は埋没谷化しており旧状が不明である。奥行きも短く、ここでの水田耕作は不適であろうと考えた。なお、眼下の郷坂川の谷底は幅50m程度の規模であり、全面にわたって水田化されている。乾田も見られることから本来の沖積地は幅30mくらいだろう。この本来の沖積地の谷頭は遺跡付近にあり、それより上流は後世の開田によって乾田化されている。本来の沖積地はこれより上位では谷川状になり、きわめて狭小である。遺跡眼下の郷坂川沿いに水田生産域を想定したい。

#### 玉川向遺跡（参考）

岩手県九戸郡軽米町にある。平成14年に荒廃砂防事業にともなって発掘調査され、弥生時代初頭砂沢期の住居3棟と住居状遺構4棟が検出されている。遠賀川系土器の出土については、立地調査時には発掘途中だったために詳細は不明であるが、参考資料として調査した。

遺跡は小玉川最上流のウタナイ沢右岸の山麓崩落面につくられた小さな舌状低台地に立地する。先端部に住居7軒が重複して検出されている。この地点は谷川の現水面とほぼ同レベルである。北上・三八地域では縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺跡は比較的比高の高いところに立地するのに比べて、きわめて特異な立地を示す。

#### 小峠遺跡（16）

青森県八戸市根城字笹子あるいは是川字小峠にある。遠賀川系土器の出土地点は文献を未確認のため、現在特定できない。

青森県遺跡地図によれば、笹子遺跡は2地点ある。03101（旧台帳78）地点は長い帯状の谷の左岸丘陵裾の緩斜面にある。良好な水田可耕地をもつ落合地形である。03102（旧台帳79）地点は03101地点の谷の左岸に開析された反対側の馬淵川からの谷の接点にあたる馬の背状の狭い丘陵部になる。農耕可耕地を近くに見るのは難しい。両開析谷の谷頭部分に立地しているとしかいえない。

また、小峠遺跡は青森県遺跡地図では03145地点で、03101地点と同じ長い帯状谷地のやや下流の右岸に位置している。ここにも小さな支谷がはいる落合地形となっており、良好な水田可耕地が想定できる。

#### 松石橋遺跡（図6-17）

青森県三戸郡南郷村島守にある。1968年開田工事の際に遠賀川系土器が採集された。供伴土器や出土状態は不明。調査時には県道拡幅工事に伴って青森県埋蔵文化財センターが隣接地を発掘調査中であつた。担当者の工藤氏に

よれば、縄文時代中期末の住居が検出されているが、晩期終末から弥生前期の遺物は少量で遺構はまだ検出されていないということであつた。

遺跡周辺は地図上では水田化されているが、戦後の開田である。現状では畑地に戻っている。戦後の開拓では地形の改変が著しいが、遺跡の立地する地点は山麓崩落土で形成された台地だと思われる。地元住民への聞き込みによると、この台地内には開析谷はなさそうである。至近なところでの生産域は見あたらない。しかし、北方にある新井田川右岸の段丘面はやや発展性のある水田可耕地として想定できそうである。この地域にも若干崩落地形が見られるが、山麓斜面に集水可能な小さな谷が連続していることから、谷水を利用した網状の小開析谷による小水田が想定できよう。

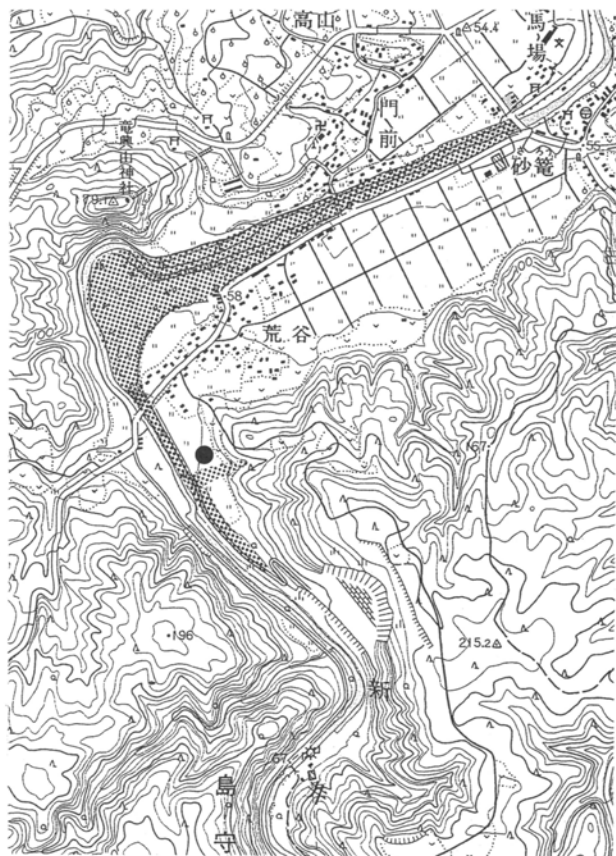
#### 是川中居遺跡（図6-18）

青森県八戸市是川にある。是川遺跡は中居遺跡・一王寺遺跡・堀田遺跡などの総称で、1957年に国の史跡に指定されている縄文時代晩期を中心とした遺跡である。昭和55年の歩道橋建設工事に伴う発掘調査で遠賀川系土器が出土している。その後、周辺が展示施設として整備される過程で数次の発掘調査が実施されて、縄文晩期から弥生初頭の土器が多数出土し、遠賀川系土器の出土数も増えている。なお、隣接する是川堀田遺跡では稲稈圧痕のある砂沢式土器が出土している。

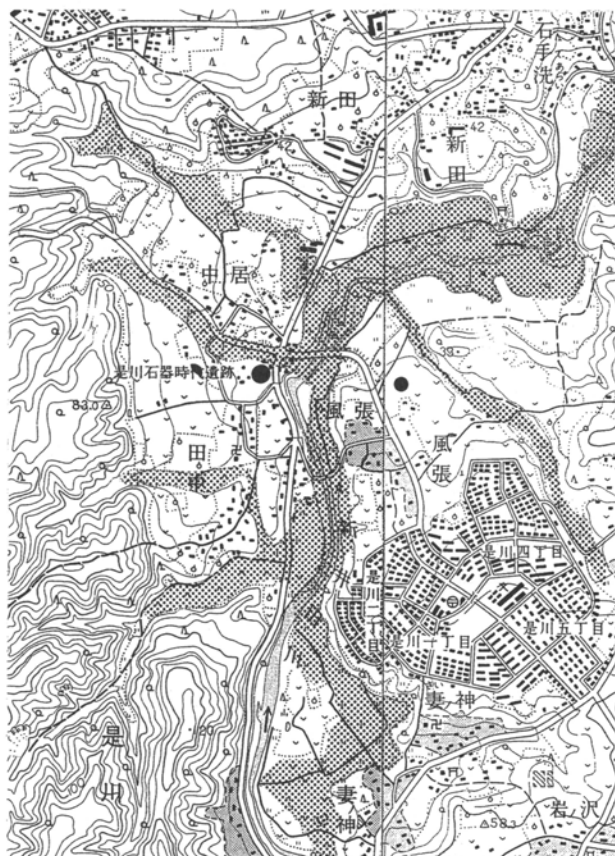
遺跡の左岸に開析された支谷が、新井田川の沖積地に出てくる谷口にある。これまでの報告に記載された遠賀川系土器の出土地点は段丘上と支谷内にある。可耕地は新井田川沖積地と帯状の支谷の谷地の両方を想定できる。遠賀川系土器の出土はないが同時期と考えられる風張遺跡も、新井田川を隔てた対岸の谷口で同様な立地を示す。

これらの支谷は現在水田化されている。堆積が進んでおり分厚い「泥炭層」が発達しているために保水性は高いが、水田耕作上では排水不良であることも注意しておきたい。縄文時代晩期の有機質遺物が残されていることから、このような状況は弥生時代前期にもあつたであろうことが想像される。東北地方の弥生時代前期遺跡では、想定された水田耕地は意外と湿地が少なく、乾田か半乾田をイメージするものが多いことに気づく。その点で、この是川中居遺跡は特殊な立地といえるかも知れない。

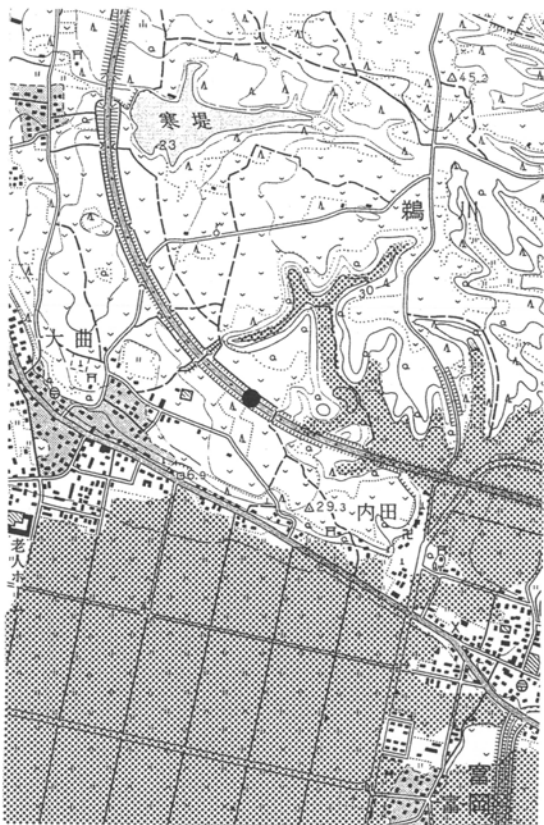
本遺跡は、その遺物の出土量からみると縄文時代晩期におけるこの地域のセンタ的な性格を有することと、今後も遠賀川系土器の出土が期待されるところであり、それらの出土地点を中心に調査経過を注視していきたい。



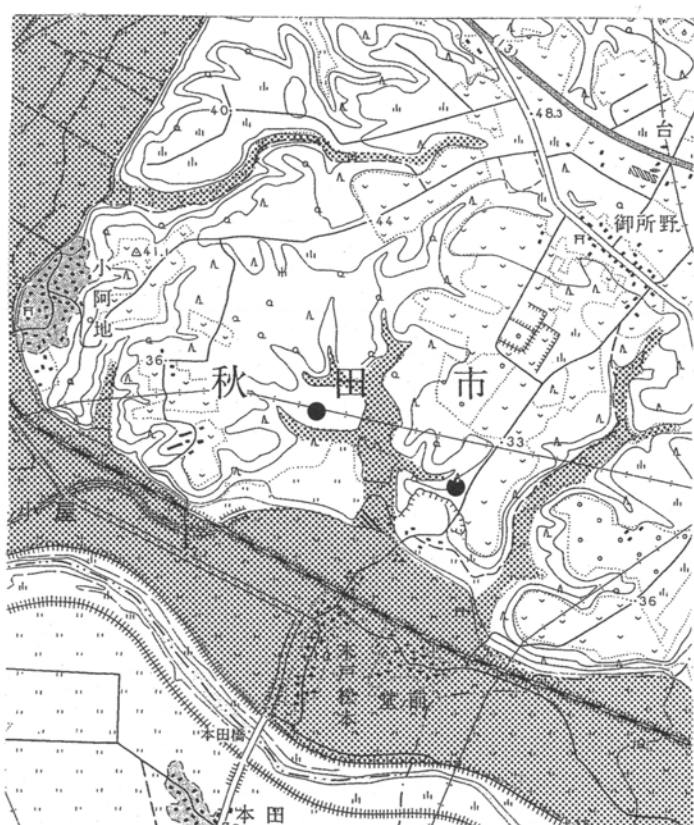
### 17. 松石橋遺跡



18. 是川中居遺跡



## 19. 館の上遺跡



20. 地藏田遺跡・湯ノ沢A遺跡

図6 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(6)



## 館の上遺跡（図6-19）

秋田県山本郡八竜町にある。一般国道7号線琴丘能代線道路建設事業に伴って発掘調査された。平成5年に発掘調査されたA区で、土器埋設遺構や土器棺墓・土坑墓が集中して検出された。ともに墓域を形成していたと考えられている。これらに使用されている大型の土器は遠賀川系土器が主体を占め、伴出する小型の土器はおおむね砂沢式と報告されている。また発掘区南側の平坦部には土坑墓群に対応する住居群が想定されている。

遺跡は丘陵末端、鶉川右岸の「成合台地」と呼ばれる台地上に立地する。沖積地との比高は20m。台地上は広い平坦地形で、その中央部に遺跡がある。検出された遺構は墓域群であり、同じ時期の集落はおそらくこの台地上のどこかにあるだろう。

北東側は幅30～50mの開析谷樹枝状に入り込んでいく。遺跡がこの開析谷に接しているのなら、遺跡付近では幅30m程度になる。南西は八郎潟に臨む広大な沖積地が広がるが、ここは耕地整理がすすみ、微地形の観察はできない。

調査では開析谷の方を水田可耕地と想定しておいた。

## 地蔵田遺跡・湯ノ沢A遺跡（図6-20）

地蔵田遺跡は秋田県秋田市四ツ小屋に、湯ノ沢A遺跡は秋田県秋田市末戸にある。両遺跡とも山麓末端に東西にのびる丘陵性の「御所野台地」上に立地する。地蔵田遺跡は昭和60年に、湯ノ沢A遺跡は昭和58年に、秋田臨空港新都市開発事業に伴って発掘調査された。

地蔵田遺跡では土器棺墓25基とそれに隣接して住居群が検出された。これらの遺構は大きく2時期に分けられており、はじめは柵木に囲まれた3軒の住居とその南東外側に土器棺墓・土坑墓からなる墓域がある。次期には住居は4軒に増え、墓域も拡大している。土器棺は遠賀川系土器が主体で、合口で用いられた鉢は砂沢式と弥生時代中期に下るものがあるとされている。住居から遠賀川系土器は出土していないが、伴出土器から土器棺墓と同時期と考えられている。湯ノ沢A遺跡は竪穴状遺構と土器埋設遺構から遠賀川系土器の壺2点と破片数点が出土している。

両遺跡のある台地面はほぼ平坦である。この台地には、地蔵田遺跡の南西と東に幅の広い開析谷が発達している。南西側の谷は短く、侵食は進んでいない。谷口部には流出した土砂で形成された扇状地状の微高地をもつ。東北の谷は長く、樹枝状に発達しており、侵食も深い。この谷は水量も多く、谷の中に湿地帯をもつ。現在は湿地の一部が農業用水池として利用されている。

地蔵田遺跡で検出された集落は、台地中央から南西側に立地している。眼下の谷に生産地があるとすれば乏水性で発展性の少ない小規模な水田経営と考えられる。一

方、北東側の谷に生産地を求めるとすれば、台地内平坦地の広さと水流の豊かさから、南西谷の数倍の生産域を確保することができるだろう。

なお、両谷の合流点より南は、拡大性のある沖積地が続いている。この部分を生産地とする場合には、遺跡立地は台地を降りて下の微高地上になるのが妥当だと思われる。しかし、地蔵田遺跡の集落は台地上にあることから、やはり両側の谷中に本遺跡の生産域を求めるべきと考えられる。ここは発展性の少ない谷水田地域になる。

また、湯ノ沢A遺跡は地蔵田B遺跡の北東の谷を隔てた対岸にある。この遺跡の生産地も北東側の発展性のない谷に求められるだろう。

## 生石2遺跡（図7-21）

山形県酒田市生石にある。昭和60年に実施された県営圃場整備事業に伴って発掘調査された。遠賀川系土器が出土したのはC区・E区の包含層で、C区では黒褐色粘質土中から200個体以上の弥生土器が集中して出土している。E区でも土器集中地点が検出されている。出土した土器は「砂沢系」土器と遠賀川系土器とその「折衷系土器」が共伴していると報告されている。靱痕のある土器やコーングロスのあるスクレーパー類も出土している。明確な遺構は検出されていない。またE区西辺部では弥生時代後期の天王山式土器が少量出土している。

遺跡周辺では「出羽丘陵」の山麓から流れる矢流川が山麓末端で小規模な微高地状の扇状地をつくっている。生石2遺跡はその左岸、扇状地末端に立地する。圃場整備などで地形改変が進んでいるために詳細は不明であるが、遠賀川系土器を出土する遺跡の地形としたら、前面に広大な網状の沖積低地を可耕地としてもつ発展性の高いところになる。

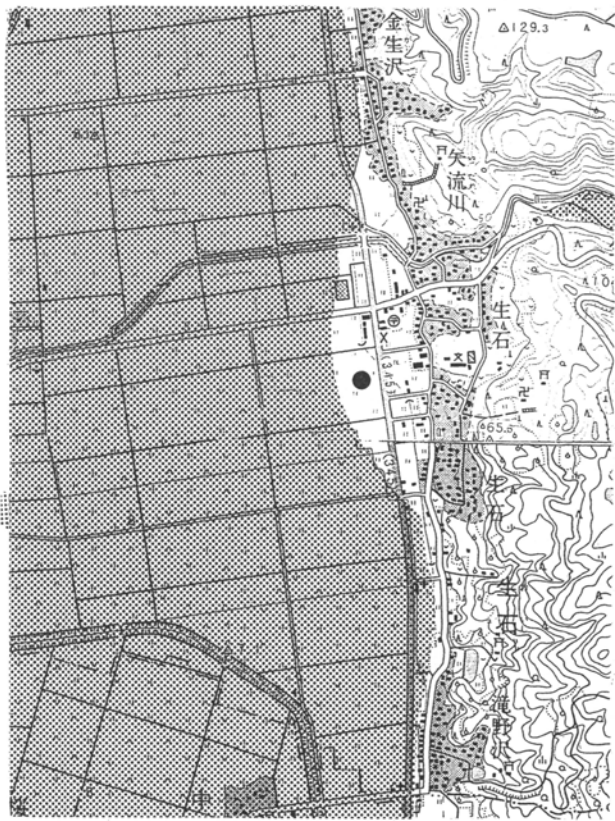
地蔵田遺跡の場合と基本的地形構造は同じだが、こちらは山麓末端の微高地上に遺跡が立地するという違いになる。地蔵田遺跡の場合は集落周辺に水田があるとすれば谷水田で、水田耕地の拡大性はやや不良であるが、生石2遺跡は拡大性に富むということになるだろうか。

E区西辺部で出土した天王山式土器は、生石2遺跡の発展性（拡大性）の傍証となろう。

## 新聞A遺跡（参考・図7-a）

秋田県南秋田郡川井町黒坪字新聞にある。昭和41年に発掘調査され、狭い範囲から約200点の土器が出土した。そのうち1点に靱痕が見つかっている。遠賀川系土器の報告はない。出土土器は弥生時代前期、地蔵田遺跡とほぼ併行する時期と考えられている。

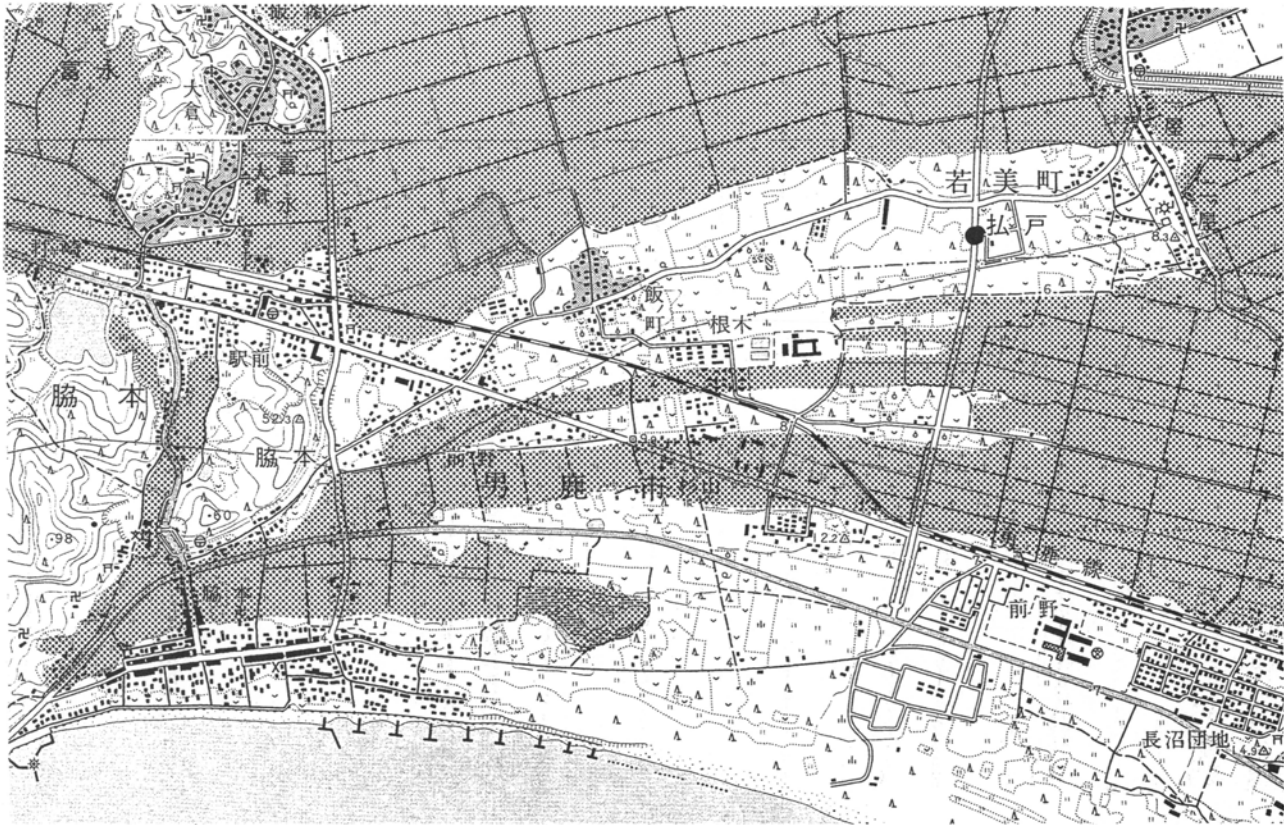
遺跡は丘陵の西側に突出した部分の末端にある、狭小な低台地に立地する。遺跡は南西に面する。眼前の広大な低地は一面の圃場整備でほとんど微地形を探ることは



21. 生石2遺跡



a. 新間A遺跡(周辺可耕地のみ推定)



22. 横長根A遺跡

図7 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(7)

できない。国道285号線の起伏によって丘陵からでる谷地を想定することができる。

幅30m前後の谷地が遺跡の周囲から数本のびている。この部分が生産地と思われる。おそらく、この谷地はやや湿性に富むのではなかろうか。眼前の水田地帯を遺跡の生産地に想定した場合、網状にのびる低地帯が拡大性のある生産域と思われる。

#### 横長根A遺跡（図7-22）

秋田県南秋田郡若美町にある。昭和57年から58年にかけて県道改良事業や町住宅団地造成事業に伴って発掘調査された。A地区から竪穴住居1軒が検出され、変容の大きな遠賀川系土器壺が出土した。また住居からは炭化米48粒が出土した。遺構外からも多量の土器が出土しているが、中期初頭に位置づけられている志藤沢式土器が主体と報告されている。また遺跡内からは縄文時代晩期大洞BC～C1式土器が出土している。

遺跡周辺には八郎潟をせき止める砂丘帯が3列あるが、遺跡は最奥部の巾の広い第Ⅰ列砂丘上に立地する。砂丘の南側が海、北側が八郎潟である。南側の小規模な砂丘との間に幅約50mの後背湿地がある。足首が沈む程度の湿田と思われる。北側は圃場整備が進み、詳細地形は不明だが、おそらく帯状の低湿地（後背湿地）があったと思われる。こちらも足首程度の湿田か。水田としては排水不良の可能性もあるが安定した耕地といえよう。拡大性もある地点である。

#### 芋野Ⅱ遺跡（図8-23）

岩手県宮古市芋野にある。平成3年の農道整備事業に伴う調査で、弥生時代前期の包含層が検出された。土器は砂沢式土器が主体で、そのなかに2片の遠賀川系土器が報告されている。二枚橋式（中期）や天王山式（後期）土器の出土も報告されている。

芋野川左岸の山麓から流下する三つの小河川が合流する地点にあたり、それぞれの谷川からの土砂の押し出しによって、小規模な扇状地地形が形成されている。遺跡はこの扇状地の扇端近くに立地する。芋野川との比高はかなりある。芋野川沿いには水田造成の可能な沖積地がない。

現在、これらの谷は谷口近くまでが堆積土で埋まっているために旧状は不明であるが、おそらく三つの谷川の水によって小規模な水田が経営されていたのだろう。この扇状地面の中央部分はやや低くなっている。道路と芋野川の間は3面の畑になっており、最下段は現在水田として利用されている。これらの耕地は後世に人工的に造成されたものであるが、弥生時代の水田はこの部分にあったとも考えられる。最大でも100㎡ほどの狭い水田しか考えられない。

#### 兵庫館跡（図8-24）

岩手県北上市和賀町にある。東北横断自動車道秋田線の建設に伴って平成元・3年に発掘調査された。弥生時代の遺構は埋設土器3基、墓坑1基、配石1期が検出された。出土した遠賀川系土器は墓坑にあった3個の壺のうちの1個である。

遺跡は和賀川右岸の低位段丘「金ヶ崎段丘」上に立地する。和賀川との比高は30m以上もあり、水田耕地としては和賀川流域の沖積地は遠すぎる。また、段丘後方の広い平坦地は現在広域な水田地帯になっているが、ここは夏油川からの大量引水によって後世に水田化された地帯である。この遺跡は中世館跡と重複しており、両サイドは自然の深い谷を利用して区画されている。この両側の谷の谷頭は台地後方では浅くなりつつ奥まで入り込んでいる。地元老人の話では、この谷頭にはかつて湧水があったという。おそらくこの帯状の谷地が生産域であろう。

#### 十三塚遺跡（図8-25）

宮城県名取市手倉田にある。昭和51～53年におこなわれた遺構確認調査で遠賀川系土器が出土した。遠賀川系土器が出土したのは昭和53年度に調査された東D区B・C地点である。変形工字文のある土器とともに出土しており砂沢式並行と考えられている。ほかに石庖丁1点と環状石斧・アメリカ式石鏟が出土している。

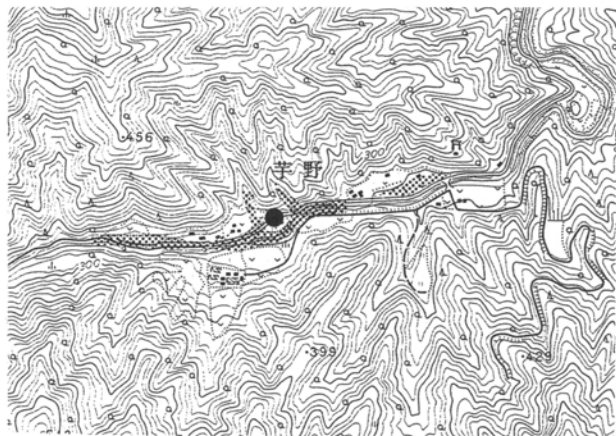
遺跡は、手倉田にある広い低平地へ伸びる、狭い開析谷の谷頭にある。谷は現在植林されており乾燥化しているため。現況把握が難しい。しかし、開析谷前方に広がる広大な沖積地は距離的に遠く、可耕地を求めるとすれば眼前の開析谷の中になるだろう。

#### 原遺跡（図8-26）

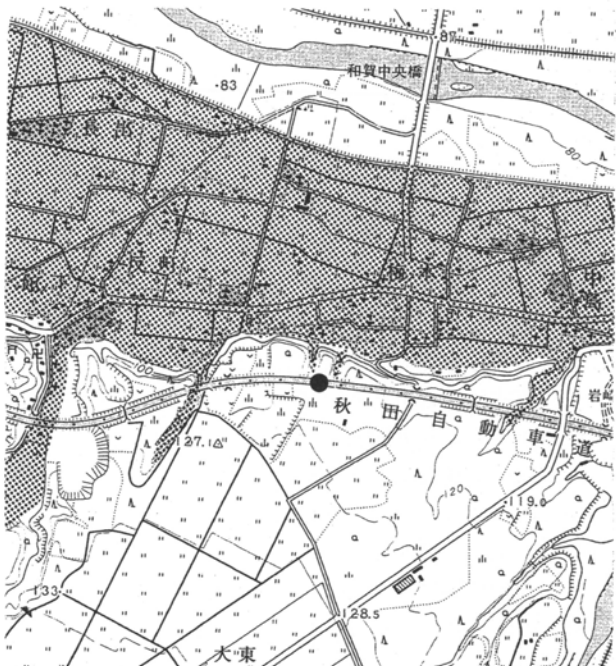
宮城県名取市田高にある。これまで、数地点で発掘調査が実施されており、遠賀川系土器は県道名取村田線と仙台観光施設建設の2地点で出土している。県道名取村田線の調査は平成7年に行われた。報告書によれば原遺跡の第5次調査という。発掘地点は明治時代中期の区画整理までは畑として利用されていた。発掘区は幅12m、長さ200mと細長い。発掘区東部のⅡ区3号河川跡で縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭の土器が出土した。特に4層中から多くの土器がまとまって出土している。調査者は「一次堆積と考えられ、廃棄に近い出土状態」と推定している。

遺跡は名取川左岸の低地帯にあり、自然堤防に旧河道や後背湿地が複雑に入り組む地域に立地する。遺跡周辺は市街化が進み詳細な地形観察はできなかったが、自然堤防の後背湿地を生産域としたと推定できる。

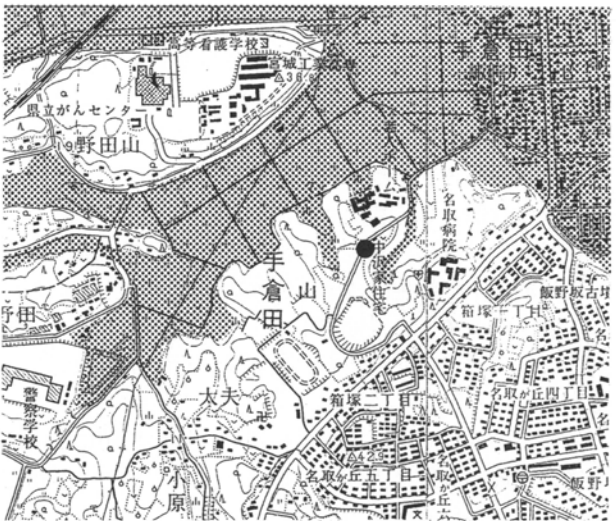




23. 芋野II遺跡



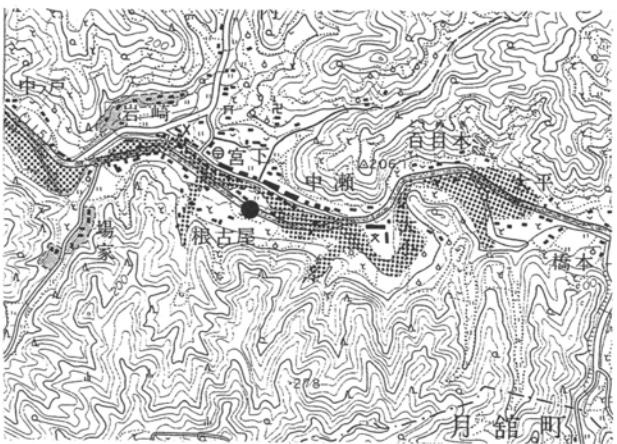
24. 兵庫館跡



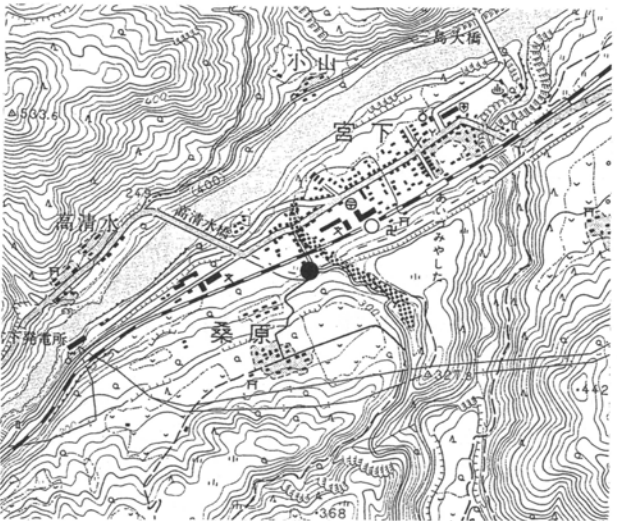
25. 十三塚遺跡



26. 原遺跡(可耕地は復元不能)



27. 根古屋遺跡



28. 荒屋敷遺跡

図8 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(8)



## 根古屋遺跡 (図8-27)

福島県伊達郡霊山町にある。昭和56年に住宅新築工事に伴って発掘調査された。土器埋設遺構が25基集中して検出された。遠賀川系土器はB地区第25号土器埋設遺構から出土した。大洞A'式(岩尾段階)から砂沢式並行の青木畑段階と推定されている。

遺跡は、石田川右岸の段丘を覆う小扇状地の裾野にあると思われる。発掘では再葬墓がみついているが、近くに居住域があることが想定される。水田生産域は扇状地上の小河川沿いか、石田川沿いの段丘下低地と考えられる。周辺には段丘地形に可耕地が点在するが広大な低平地はなく、典型的な山間部立地の遺跡であるといえる。

## 荒屋敷遺跡 (図8-28)

福島県大沼郡三島町にある。昭和61年の国道252号線改良工事に伴って発掘調査された。G-14地点の遺物包含層(CIVa層)から遠賀川式土器の壺が出土している。沈線で工字文を描いた破片を伴出した。この壺は胎土の鉍物分析の結果、搬入品と考えられている。また、縄文時代晩期から弥生時代と推定されているIII・IV層からイネ属のプラントオパールが検出されている。また同層からはムギのプラントオパールも見ついているが、栽培種との区別はできないとの報告がある。

遺跡は只見川右岸段丘に大谷川・倉掛沢の流入によって形成された扇状地面に立地する。根古屋遺跡と同様なきわめて小規模な扇状地である。周辺の地形は住宅地化によって破壊されているために、水田可耕地を想定できる沖積地などの地形について詳細観察はできなかった。しかし、部分的に小規模な開析谷があった痕跡もみられることから、とりあえずその地帯を水田可耕地としておこう。

## 鳥内遺跡 (図9-29)

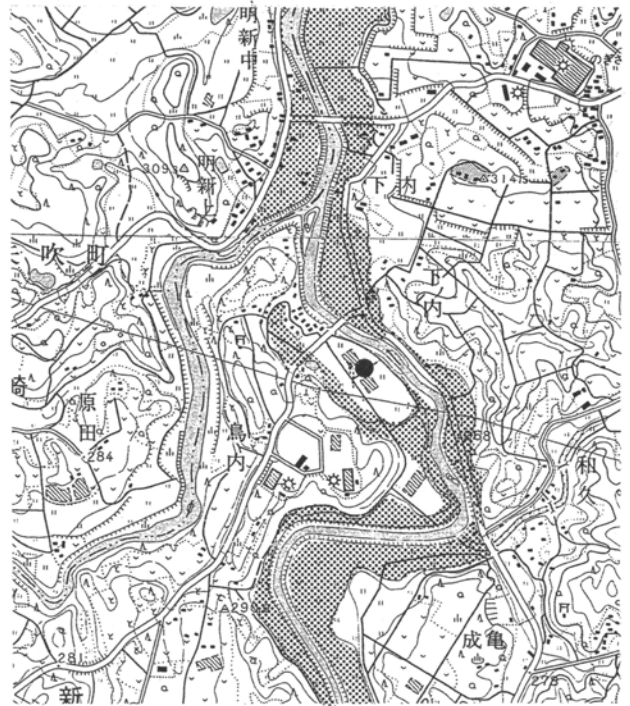
福島県石川郡石川町にある。昭和45年に鳥内集落の開田事業に伴って発掘調査された。縄文時代晩期終末から弥生時代中期にかけての再葬墓がIVE区に集中して17基検出されている。18号土坑から遠賀川系の大型壺4個が在地の土器とともに出土した。伴出土器から大洞A'式の新しい段階と見られている。また他の土坑からは東海地方から搬入された条痕文系土器も出土している。

遺跡は、社川の左岸に形成された河岸段丘上にある。しかし、遺跡の立地する段丘は背後の丘陵から流下する小流によって開析された狭く浅い埋没谷に接していると思われる。この段丘に接する社川左岸は崖状を呈しており、段丘上に居住域があるとすれば、水田生産域はこの小規模な開析谷しかない。

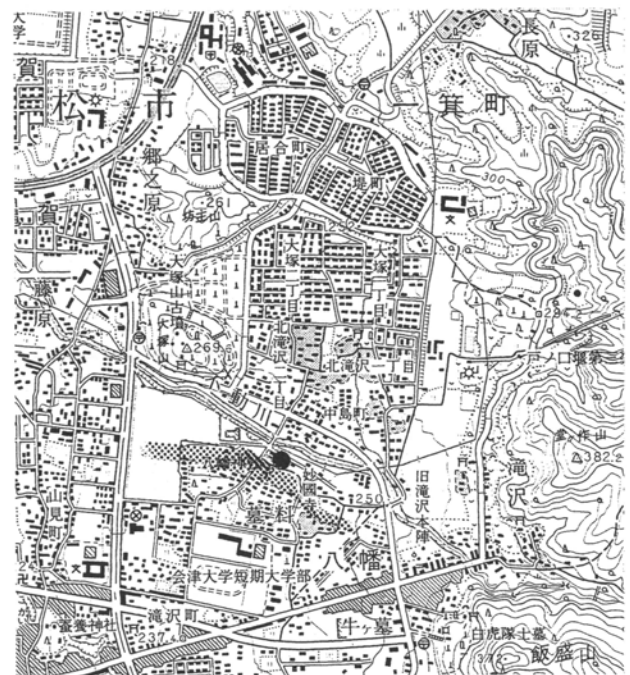
## 墓料遺跡 (図9-30)

福島県会津若松市一箕町にある。昭和55年に遺跡範囲確認のために発掘調査された。部分調査であるが、東地区で7基の土坑が検出された。墓域の北西端があきらかになり、大洞A'式の時期から墓が作られていたことがわかった。

飯盛山山頂から流れる不動川の小規模な扇状地の扇央



29. 鳥内遺跡



30. 墓料遺跡

図9 遠賀川系土器出土遺跡と周辺の沖積地(9)

付近に立地する。川筋に狭い沖積地が形成されている。現在、遺跡部分は畑地になっているが、多くの部分で水田化されている。この水田部分も扇状地面上にあると思われる。大量の壺棺再葬墓がみついているが、この沖積地にそって居住域もあると考えられる。なお、遺跡には土師器が散布していることから、その時期の農耕集落も想定できよう。

生産域については、この扇状地内か扇端低地が想定されるが、現在は住宅密集地になっており、詳細な観察が不可能になっている。

4. 東北地方の弥生時代前期集落の立地

遺跡立地調査の結果、東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の立地は、すべての遺跡で広狭の差こそあれ水田耕作が可能であり、図10のようなA～Eの6つの水田農耕を前提にした集落の立地パターンを認識することができた。ただし、このパターン認識は、水田稲作開始期（受容）の動向をみるものであり、米志向を中心にした農業社会の確立を示すものではない。

Aパターン：農耕集落として最も発展性（耕地の拡大性）のない立地である。小河川の谷筋にあり、谷口に形成された山麓からの小水流が形成した小扇状地や段丘上などに立地する。これらの遺跡がある地形は扇状地あるいは段丘・台地と異なるが、水田農耕環境は同じでありAとして一括した。すなわち河川がなく、浸みだし水などの利用しかできない乏水性の地点である。水田可耕地は猫の額のような狭さである。

Bパターン：継続性はあるが、発展性の少ない立地である。中小河川の谷筋にあり、開析谷が合流する落合低地を望む山麓および台地上に立地する。落合低地は小河川の合流によって豊富な水を確保できるが、可耕地の面積

が少ない。  
Cパターン：発展性のややある立地である。中小河川が広い低地に出る谷口の台地上や、沖積地に面した台地上に立地する。同じ地点に立地しても、谷口でやや広がった中小河川の帯状低地を水田可耕地とするC1パターンと、さらに台地下の広い低地を可耕地とするC2パターンに分けられる。

Dパターン：発展性のある立地。中小河川が谷口に形成した扇状地上に立地する。河川や湧水もあり、扇端の広

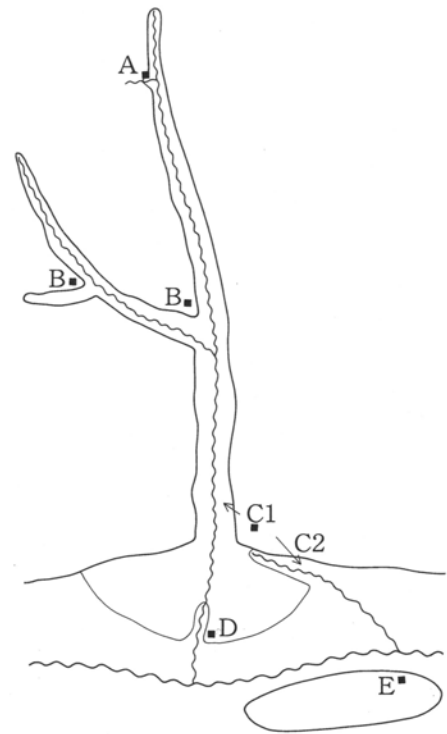


図10 初期農耕集落の立地パターン

表2 東北地方遠賀川系土器出土遺跡立地パターン分類

可耕地の発展性	立地パターン		地 点	地 形	可耕地	岩木山麓
無し	A	谷筋タイプ	小河川の谷筋	小扇状地上や台地縁辺	小水流沿いの沖積地ごく狭い	宇田野2遺跡(青森) 大曲遺跡(青森)
	B		小河川の谷筋	開析谷の合流点台地上	落合の沖積地	吾妻野II遺跡(青森) 砂沢遺跡(青森)
	C1		中小河川の谷口あるいは河川沿いの台地縁辺	沖積地に面した台地上	谷内の沖積地	
有り	C2				台地下の沖積地	(小友遺跡・神原遺跡)
	D	平地タイプ	中小河川の谷口	扇状地上	広い低地	
	E		低地内	自然堤防・砂丘・低台地上	後背湿地・広大な低地	

い低地を安定した水田可耕地としてもつ。  
Eパターン：さらに発展性のある立地。比較的大きな河川の自然堤防や海岸砂丘上に立地する。周辺の広大な低地を水田可耕地としてもつ。河川もあり水は豊富であるが、洪水の危険もある。

これらのパターンを流域別・地域別に分類したのが表2である。遠賀川系土器が出土する遺跡の8割は発展性のあまり無い谷筋に立地していた。さらに5割はごく狭い可耕地しかもたない立地を示している。一方で2割は発展性のある広い低地に面したところに立地している。岩木山東麓や馬淵川流域には平地タイプの地形があるにも関わらず、遠賀川系土器を出土するほとんどの遺跡がそこに立地していない。これは遠賀川式土器出土遺跡の立地の背景にあるのは、水田可耕地の発展性で無いことを示している。

なかには可耕地と推定できる地点が二カ所あって、パターンの分類に迷うものもある。剣吉荒町遺跡は馬淵川の沖積地(Dパターン)を水田耕地と推定したが、遺跡に接した帯状の谷地が水田耕地(Aパターン)の可能性もある。館の上遺跡は遺跡北東側の開析谷を可耕地(Aパターン)としたが、南西に広がる八郎潟の広大な沖積地(Eパターン)が水田耕地になっていた可能性もある。

水田可耕地の広さの違いは、歴然としている。各遺跡位置図からこれを見ると、山麓小扇状地に立地する根古屋遺跡や金田一川遺跡は、猫の額ほどの低地が可耕地として推定される。一方、生石2遺跡や五輪野遺跡の周辺の可耕地は、周辺に広がる低平地に想定することができ、耕地の拡大という発展性のある農耕集落の立地をとっていることがわかる。

遺跡の継続性をパターン別に並べたのが表3である。  
遺跡の時期は細かな土器編年の検討をおこなっていないが、高瀬克範による編年を参照して、出土した遠賀川

系土器の時期とその前後の遺跡内の継続性を示した(高瀬2000b)。東北地方の遠賀川系土器は、大洞A'式期に出土しはじめて、砂沢式期に最も多くの出土例がある。さらに二枚橋式や井沢式、志藤沢式などの中期初頭の土器と伴出する例も散見される。

大洞A'式土器は従来から縄文時代晩期後半の土器として位置づけられてきた。近年では、全国的な土器編年網の整備によって、大洞A'式土器が板付II式中葉と併行することが明らかにされつつある(設楽2004)。大洞A'式土器の時代を弥生時代とするかはまだなお議論が必要であろう。ここでは大洞A'式土器を縄文時代晩期末の土器とし、当該期が弥生時代であるかどうかについては保留としたい。

出土土器による遺跡の継続性については資料不足からの制約条件も多く不安定な分析にならざるを得ないが、東北地方の遠賀川系土器出土遺跡のうち約7割の遺跡には、縄文時代晩期の遺物が出土しており、大洞A'式と遠賀川系土器が伴出する遺跡もある。このような遺跡は現在の段階では、Aパターンの遺跡に多い傾向がある。

また遠賀川系土器が出土した遺跡で弥生時代中期および後期の遺物が出土するのは、BパターンとEパターンの遺跡であり、現在のところAパターンの遺跡にはほとんど無い。Bパターンは落合地形の可耕地をもち、谷筋タイプの遺跡の中では水田稲作がやりやすいところである。またEパターンは広い可耕地を周辺にもち、発展性のある遺跡立地である。この両パターンの遺跡に中期・後期まで継続する遺跡が集中することは中期以降に水田農耕社会への本格的な転換が進んだことを示しているのかもしれない。このことは遠賀川系土器以外の弥生時代前期集落遺跡との関連や前期から中期への集落動向を検討し直す必要があろう。

以上のように、東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の多

浅瀬石川流域	馬淵川流域	新井田川流域	日本海側	太平洋沿岸	内陸部
	金田一川遺跡(岩手) 足沢遺跡(岩手)	牛ヶ沢遺跡(青森) 大日向II遺跡(岩手) 君成田IV遺跡(岩手)	館の上遺跡(秋田)	芋野II遺跡(岩手)	兵庫館跡(岩手) 根古屋遺跡(福島) 荒屋敷遺跡(福島) 鳥内遺跡(福島)
井沢遺跡(青森)	上杉沢遺跡(岩手)	畑内遺跡(岩手)			
	八幡遺跡(青森) 小峠遺跡(青森)	松石橋遺跡(青森)	地藏田遺跡(秋田)	十三塚遺跡(宮城)	
		是川中居遺跡(青森)			
	剣吉荒町遺跡(青森)		生石2遺跡(山形) (新間A遺跡)		墓料遺跡(福島)
五輪野遺跡(青森)		横長根A遺跡(秋田)	原遺跡(宮城)		

くは、近くに縄文時代晩期の遺跡があり、水田農耕集落としての立地パターンをもっていた。これは縄文時代晩期終末の遺跡のなかで水田稲作の可能なところに遠賀川系土器に象徴される水田稲作情報が受容されたことを示している。しかし、遺跡の多くが狭い可耕地の地点にあることは、東北地方の弥生時代前期の集落立地が水田可耕地の発展性を第一義として行われたのではないということをも示している。

また、伝播のルート論についても各種の議論がある。しかし、今回の現地調査の結果では、遺跡分布にルートの偏在がみいだせないことと遺跡立地に選択的な恣意性が認められないことから、疑問も生じている。遠賀川系土器に象徴される水田稲作情報は、いわゆるルート論として語られるような線状ではなく、列島を網の目状に侵食するような伝播をしていったのであろうか。現地調

査の過程でも縄文時代晩期末の情報ネットワークによって水田稲作情報が弥生時代前期の時間幅のなかで、じわじわと確実に浸透していった可能性を捨て切れなかった。

多くの場合、初期弥生土器の出土遺跡にはその後の継続性がない。本格的な農耕集落としての遺跡選地はその後に起こるのであろう。青森県黒石市東部・南部の弥生時代中期以降の遺跡分布の増加動向（青森県教育委員会1985）はその一端を示しているのだろう。このことは以前におこなった関東地方の調査でも同様な事象がとらえられている。

なお、下記の4遺跡は、前稿の再検討をおこなった結果、次のように分類を変更した。畑内遺跡はAパターンからBパターンへ、君成田IV遺跡はBパターンからAパターンへ、鳥内遺跡をEパターンからAパターンへ、兵

表3 立地パターンから見た東北地方の遠賀川系土器出土遺跡

遺跡番号	遺 跡 名	県	立地	晩 期＋遠賀川系		弥生Ⅰ＋遠賀川系		弥生Ⅱ＋遠賀川系	
28	荒屋敷	福島県	A	大洞A'式	包含層・遺構外				
29	鳥内	福島県	A	大洞A'式	墓				
8	足沢	岩手県	A	大洞A'式	包含層・遺構外				
7	金田一川	岩手県	A	大洞A'式	墓				
23	芋野Ⅱ	岩手県	A	大洞A'式	包含層・遺構外	砂沢式		二枚橋式	
2	大曲	青森県	A	大洞A'式		砂沢式	包含層・遺構外		
3	宇田野(2)	青森県	A	大洞A'式		砂沢式	包含層・遺構外		
19	館の上	秋田県	A	縄文晩期末葉		砂沢式	墓		
15	君成田Ⅳ	岩手県	A	大洞A'式		砂沢式	墓		
12	牛ヶ沢(3)	青森県	A				？		
14	大日向Ⅱ	岩手県	A			砂沢式	住居		
24	兵庫館	岩手県	A			類例無し	墓		
27	根古屋	福島県	A			青木畑式	墓		
9	上杉沢	岩手県	B	晩期中葉～末		砂沢？	住居		
13	畑内	青森県	B	？		砂沢式	住居		
4	砂沢	青森県	B	大洞A'式		砂沢式	包含層・遺構外	二枚橋式	
1	吾妻野Ⅱ	青森県	B			砂沢？	墓	二枚橋式？	
5	井沢	青森県	B	大洞A式				井沢式	包含層・遺構外
25	十三塚	宮城県	C 1	晩期		砂沢式	包含層・遺構外		
17	松石橋	青森県	C 1	晩期終末		前期	包含層・遺構外		
10	八幡	青森県	C 1	晩期前葉		砂沢式	住居、包含層・遺構外		
16	小峠	青森県	C 1				包含層・遺構外？		
20	地藏田	秋田県	C 1	大洞A'式	墓	砂沢式			
18	是川中居	青森県	C 2	大洞A'式	包含層・遺構外	砂沢式	包含層・遺構外		
30	墓料	福島県	D			砂沢式	墓		
11	剣吉荒町	青森県	D	大洞A'式	包含層・遺構外				
21	生石2	山形県	D			砂沢式	包含層・遺構外		
26	原	宮城県	E	晩期後半		青木畑式	墓		
6	五輪野	青森県	E			砂沢式？	墓	井沢式？	
22	横長根A	秋田県	E					志藤沢式	住居



庫館をC1パターンからAパターンとした。ほかの遺跡についても詳細な分析や新たなデータの追加によって分類が変わる可能性はあるだろう。しかし、生産域の点では大きな変更はない。

## 5. おわりに

遠賀川式土器は西日本の初期水田稲作社会の土器であり、それを模倣した東日本の遠賀川系土器に穀粒圧痕のある例があることから、遠賀川系土器が出土した集落は稲作をしていることを前提として考えることができるであろう。その際、可耕地は最も至近な沖積低地を考えることとした。このような視点でおこなった東北地方の遠賀川系土器が出土した30遺跡の立地調査の結果と成果をまとめた。その結果はいくつかの立地パターンに分類することができ、関東地方でおこなった遠賀川系土器出土遺跡の立地と同様であった。したがってここでまとめた東北地方の遠賀川系土器出土遺跡の特性については、関東地方を含めた東日本の特性と置き換えることも可能である。

東日本の遠賀川系土器出土遺跡の立地を見ると、水田耕作を開始するための新しい地点の選地ではなく、生活拠点としての居住域が継続しているところへ遠賀川系土器がもたらされている可能性がきわめて高い。かつて筆者らは関東地方の報告（能登・小島1989）で「選地」としたが、遠賀川系土器の到来によって改めて稲作適地を選んだ移動はおこなわれていないことになる。すなわち在地の縄文人によって生活していた地点での遠賀川系土器＝稲作が受容されたことになる。西日本からの搬入を示すオリジナルな遠賀川系土器がほとんど無いこともそれを裏付けよう。前稿での「選地」の用語は撤回し、「立地」に置きかえたい。

しかし、このことは先行する縄文時代晩期の土器型式の出土をもって認定することになる。発掘面積が少ないことなどからそれが確認できる遺跡の少ないことも事実であるために、この考え方も蓋然性の高い仮説の域を出てはいない。

また、具体的な水田遺構については青森県の砂沢遺跡と垂柳遺跡で検出されているが、イメージがあまりにも異なっている。現地調査では、多くの場合弥生時代前期の集落の稲作は、「猫の額」ほどの極めて小規模な水田経営をイメージするものであった。もちろん中期には拡大性のある遺跡または新たな選地の場合は垂柳遺跡のような広大な水田耕地をイメージすることは可能であるが、それでも弥生時代中期の遺跡立地にも小規模な開析谷に面した立地パターンが多いのはなぜなのだろうか。今後の検討課題として別稿を期したい。

## 引用参考文献

- 小林行雄 1932 「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」『考古学』第3巻第5号  
 中村五郎 1982 「畿内第Ⅰ様式に併行する東日本の土器」  
 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号  
 吉川囀男 1982 「西関東における弥生文化の波及について」『埼玉県史研究』第9号  
 伊東信雄 1984 「青森県における稲作農耕文化の形成」『北方日本海文化の研究』東北学院大学東北文化研究所紀要第16号  
 佐原 真 1986 「縄紋／弥生—東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの」『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』  
 佐原 真 1987 「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』  
 中村五郎 1988 「第三部大洞A'式とその周辺」『弥生文化の曙光』  
 高瀬克範 2000a 「東北地方における弥生土器の形成過程」国立歴史民俗博物館研究報告第83号  
 高瀬克範 2000b 「東北初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』第46巻第4号  
 設楽博己 1991 「関東地方の遠賀川系土器」『児島隆人先生寿喜記念論集 古文化論叢』  
 設楽博己 2004 「東日本と西日本の併行関係」『弥生時代の実年代』学生社  
 能登 健・小島敦子 1989 「関東地方における弥生時代前期集落の選地について」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』6  
 能登 健・小島敦子 2004 「集落・居館・都市的遺跡と生活用具—関東・東北」『考古資料大観10遺跡・遺構』小学館  
 高瀬克範 2000 「東北地方弥生時代前・中期の集落」『物質文化』68号  
 三宅徹也ほか 1975 「西津軽郡深浦町吾妻野Ⅱ遺跡の出土土器について」『青森県立郷土館調査研究年報』1  
 木村鉄次郎 1989 「西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告」『青森県立郷土館調査研究年報』13 青森県立郷土館  
 弘前市教育委員会 1988 「砂沢遺跡発掘調査報告書」図版編  
 弘前市教育委員会 1991 「砂沢遺跡発掘調査報告書」本文編  
 青森県教育委員会 1985 「垂柳遺跡発掘調査報告書」  
 青森県教育委員会 1997 「宇田野(2)遺跡 宇田野(3) 草薙(3)遺跡 津軽中部地区広域営農団地能動整備事業に伴う発掘調査報告」  
 青森県教育委員会 1997 「垂柳遺跡・五輪野遺跡」  
 尾上町教育委員会 1983 「五輪野遺跡発掘調査報告書」  
 平賀町教育委員会 1976 「井沢遺跡」  
 青森県埋蔵文化財調査センター 1984 「牛ヶ沢(4)遺跡 東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書IX」  
 青森県立郷土館 1988 「名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)発掘調査報告書」  
 栗村知弘 1960 「概説八戸の歴史」  
 文化庁 1981 「全国遺跡地図 青森県」  
 八戸市教育委員会 1987 「八幡遺跡発掘調査報告書」  
 八戸市教育委員会 1988 「八幡遺跡発掘調査報告書Ⅱ」  
 工藤竹久ほか 1986 「是川中居遺跡出土の縄文晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』2  
 鈴木克彦 1983 「青森県松石橋遺跡出土の弥生式被籠土器」『考古風土記』8  
 市川金丸ほか 1984 「青森県松石橋遺跡から出土した弥生時代前期の土器」『考古学雑誌』69—3  
 青森県教育委員会 1994 「畑内遺跡Ⅰ」  
 青森県教育委員会 1995 「畑内遺跡Ⅱ」  
 青森県教育委員会 1997 「畑内遺跡Ⅳ」  
 青森県教育委員会 1999 「畑内遺跡Ⅴ」  
 青森県教育委員会 2001 「畑内遺跡Ⅵ」  
 青森県教育委員会 2003 「畑内遺跡Ⅸ」  
 亀沢 馨 1958 「福岡町の金田一川遺跡」『岩手史学研究』29  
 佐藤嘉広 1994 「岩手県二戸市金田一川遺跡出土の土器について」『岩手考古学』6 岩手考古学会

奈良国立文化財研究所 1999 『奈良国立文化財研究所史料第50冊、山内清男資料10』

高瀬克憲ほか 1999 「浄法寺町上杉沢遺跡における縄文時代終末期及び弥生時代の土器」『岩手考古学』11

浄法寺町教育委員会 1999 『上杉沢遺跡発掘調査概報』

岩手県埋蔵文化財センター 1983 『君成田IV遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大日向II遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1983 『馬場野I遺跡』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『馬場野II遺跡発掘調査報告書』

宮古市教育委員会 1992 『細越II遺跡・芋野II遺跡』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993 『兵庫館跡・梅ノ木台地II遺跡発掘調査報告書』

秋田県埋蔵文化財センター 2000 『館の上遺跡——般国道7号線琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』

若美町教育委員会 1984 『横長根A遺跡』

田舎館村教育委員会 1982 『垂柳遺跡（昭和56年度遺跡確認調査報告書）』

村越・成田「青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡の調査」『日考協第48回総会研究発表要旨』昭和57年

秋田市教育委員会 1986 『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

山形県教育委員会 1987 『生石2遺跡発掘調査報告書』3

名取市教育委員会 1997 『原遺跡 県道名取村田線改良工事関係発掘調査報告書』

名取市教育委員会 2000 『原遺跡 仙台観光施設建設関係発掘調査報告書』

名取市教育委員会 1979 『十三塚遺跡』

霊山根古屋遺跡調査団 1986 『霊山根古屋遺跡の研究—福島県霊山町根古屋における再葬墓群—』

石川町教育委員会 1998 『鳥内遺跡』

会津若松市教育委員会 1977 『墓料—福島県会津若松市一箕町墓料遺跡発掘調査概要一』

小柴吉男 1987 「大沼郡三島町荒屋敷遺跡の畿内第1様式の壺」『福島考古』28

三島町教育委員会 1990 『荒屋敷遺跡II』

#### 遺跡位置図使用図幅

本稿に掲載した地図は、国土地理院刊行(所蔵)の1/25,000地形図の下記図幅を使用した。

図1-1『深浦』 —2『森田』

図2-3・4『板柳』

図3-5『大鰐』 —6『黒石』 —7『上斗米』 —8『浄法寺』

図4-9『稻庭岳』・『浄法寺』 —10『苦米地』 —11『剣吉』

—12『新井田』

図5-13『市野沢』 —14『陸中軽米』・『市野沢』 —15『陸中軽米』

図6-17『苦米地』・『市野沢』 —18『苦米地』・『新井田』

—19『森岳』 —20『羽後和田』

図7-21『羽後観音寺』 —22『船越』

図8-23『峠ノ神山』 —24『北上』 —25『仙台空港』・『岩沼』

—26『仙台東南部』 —27『霊山』 —28『宮下』

図9-29『磐城石川』 —30『会津広田』